

第 1 話

女子高生の娘を持つ母親、洋子 36 歳。整った目鼻立ちと、年の割には美肌を保った人妻。

「離しなさい！ なんのつもりよ！」

洋子は今、自宅の部屋で後ろ手に縛られたまま、悶えている。

「よくもチクったわね」

目の前には、娘の同級生の女が二人立っている。
こんな事態になった理由は、数日前に娘へのイジメに気付いた洋子が学校へ訴え出た事から始まった。

洋子の行動が切っ掛けでイジメっ子の二人は停学処分になってしまい、その逆恨みで行われようとしている復讐である。

「あなた達、覚悟は出来てるんでしょうね……今度は停学じゃあ済まさないからね」

「うるさいババアだなあ。もう私達はどうなってもいいのよ。あんたが泣き崩れる姿を見られればね」

二人の女子生徒により綿密に計画された陵辱劇は、イジメの謝罪をしたいという事から始まった。洋子はそんな彼女達をすっかり信用して自宅に招き入れしまったのである。

玄関を上がりしばらくすると静江と杏子は、スキについて素早く洋子の手足を縛り上げて自由を奪ってしまった。

「どういうつもりなの？ 私をコンナ目に合わせるなんて…
…何をする気かしら？ もし怪我なんかさせたら、あなた
達、裁判沙汰にしてやるわよ？
そうになったらあなた達だけの問題じゃ済まないわ。大人を
舐めるのもいい加減にきなさい！ 早くこれを解きなさい
よ！」

まだ表情の端々に幼さが残る二人を子供扱いし、縛ら
れてなお、余裕の口調で喋る洋子だったが、この時はま
だ二人の悪魔のような本性を知らなかった。

ただ、荒々しく熱を帯びた、陵辱が始まろうとしていた…

…

第2話

「やめてーっ！」

予想だにできなかった二人の女子生徒の行動。静江はいきなり洋子のスカートに手を入れたかと思うと、腹部からパンティーに進入した。

その指先は陰部に向かっていく。腰を使って体をそり返そうとするが、自由を奪われているため効果はない。パンティーの中に侵入を許された静江の右手は、陰毛をしっかりと掴み、時折、左右に引っ張っては洋子の反応を楽しむ。

「な、なにしてるのよ？ 離しなさい！」

教師、親……

二人の女子生徒……静江と杏子。二人が最も嫌う年代の女を、屈服させていく楽しみを見出しつつあった。

静江の右手の侵入に、嫌がりつつも悶える洋子に、後ろから杏子が襲いかかる。

無防備な後方から、パンティーに左手が入れられた。感覚だけで移動する左手は、まず尻の割れ目の中心で止まり、人差し指が谷間に進入して。

「……ぐ、ちよっどっ……」

勢いよく入り込んだ指が肛門に添えられた。杏子は改めて穴の存在をしっかりと指先に確認すると、肛門粘膜に強く擦り付けた。

「あ——ち、ちがうわっ！　そこは触らないでっ」

洋子は性器と勘違いしていると思ったが、杏子は最初からアヌスを狙っていた。そして必死に触らせまいと腰をくねらせる洋子を、嘲笑う。

「あれ、どこかしらここ。なんか妙にベタベタするし、シワがいっぱいあるわ」

無造作に動く指のおぞましさ。前の陰毛の羞恥など忘れさせる程の屈辱である。

「どう、こうされた方がよっぽど恥ずかしいでしょう。下手に怪我させたりなんて頭の悪い事はしないわ。簡単に訴えられないよう、他人に言い辛い事をしてやるわ。さっき大人を舐めないでって言ったけど、〇〇も舐めないでね」

その瞬間、洋子は初めて恐怖を感じた。

「さあ、まずは私達に謝りなさい。それとも今挿んでいる毛を引っこ抜いてほしい。」

「いいじゃん、汚い毛をむしってやりなさいよ」

杏子は徐々に興奮しながら、指を肛門の中心に向かって押し込もうとする。

「……ぐぐっ……ぐう……」

気が狂うような羞恥に必死に耐える洋子。だが、相手は自分の娘の同級生という事と、完全な逆恨みに屈するものかと耐えていた。

「謝れですって、〇〇の分際で。冗談じゃないわよ！ もう絶対許さないわ！ 今度は警察に行くわ……そのあとでしっかり後悔して、ママにお尻でも叩かれなさいよっ！」

この時吐いたセリフが洋子をあとから後悔させることになる。

第3話

「あぐううう……」

部屋に響いた絶叫。洋子は股間に疾走る痛みを感じた。

「なあんだ、たったの三本か。あんなムカツク事言われたからもう少し強く引っ張ればよかったわ」

力任せに抜き取って掴んだ洋子の陰毛を、部屋の電気にかざす静江。いきなりの痛みと〇〇に受けた信じ難い屈辱に、洋子はそれまで強気で構えていた気持ちが折れそうになっていくのを感じた。

「わたしの陰毛を……こんな〇〇になんで……い、いやあああつ！」

洋子に思考時間を与えぬまま、次なる攻撃が始まった。肛門を触っていた杏子の指が、第一関節まで進入していた。

「に入った、に入った。なかなか硬いわね。前の人妻は簡単にに入ったのに」

「前って……この子達は……ぐっ……」

会話の真相を追及する暇なく、指の振動が洋子の脳天まで伝わる。

「やめてええっ、お願いよ……痛いわ。こんな事してなにが楽しいのよ」

プライドを保つ気力が序々に消え失せていく洋子。しかしサディスティックの快感を知っている女生徒はまだ物足りず、洋子を蹂躪し屈辱を味わわせるつもりでいる。

「さっきのムカツク言葉もう一回言ってよ。よく聞こえなかったわ」

「……ねえ、バカな事はやめなさい。今度、問題起こしたら、あなた達タダじゃ済まないわよ？」

洋子の必死の説得は逆効果につながる。

「うるさいわね。余計なお世話よ。杏子、お尻の穴に根元まで指を突っ込んで、中をかき回してやりなさいよ。」

「はあーい。覚悟はいい？ お、ば、さ、ん」

「なっ、やっ、やめて……やめ……あ、いやあああっ！」

根元までずっぷりと入れられた指は、洋子のヒクヒクと痙攣する肛門内部で激しく、そして執拗に蠢いていた。

洋子の綺麗に手入れされている顔が、苦痛に歪む。その表情を上から覗きこみ、口角をヒク付かせて笑いながら楽しむ静江。

「フフフ、いい顔ね。それにしてもこんなに化粧して。いい年したお婆さんの分際で。まだ現役のつもりかしら」

美貌に自信がある洋子は、年の事を言われるのが一番気に入らなかつた。

「あ、あんた達には関係ないでしょう」

その言葉に顔色を変えた静江が、洋子の鼻の穴に指を突っ込んでしまった。

「う……なに……やめなさい……」

数回かき回して引き抜かれた指には、鼻糞や鼻水が付いている。

「きたない。表面を綺麗にしてもやっぱり中身は一緒ね。
おばさん、一番きたないところを綺麗にしとかないと。杏
子、そっちはどう？」

尻の割れ目から抜かれた指を確認する。長い時間、奥
深く入れられていた指は当然、便が付着していた。

「きたない。しかも臭いわよ。どうしてくれるのよ！」

洋子の鼻の近くまで持っていき、便の臭いを嗅がせる
杏子。悪臭と羞恥に責められた洋子は、同時に恐怖にも
脅えている。

「やめなさいっ……やめなさいよお……」

「ねえ、鼻糞とウンコが付いた指をおばさんに舐めてもら
いましょうよ」

第4話

「やめてえええっー！」

口元まで来た指に悲鳴を上げる洋子。

「なに嫌がってるの。どっちもおばさんの体の中の汚いものじゃない。しっかり舐めてね」

「冗談はやめなさいっ！ 本気で怒るわよ？ ……いい加減にしなさいっ……」

強気の態度で不安を覆い隠す洋子。目の前の体内の汚物を舐めるなど想像もつかない。

「冗談だって？ じゃあ口を開けなさい。この汚いウンコを塗り込んであげるわ」

「い、いやよっ！ ちょ、ちょっと！」

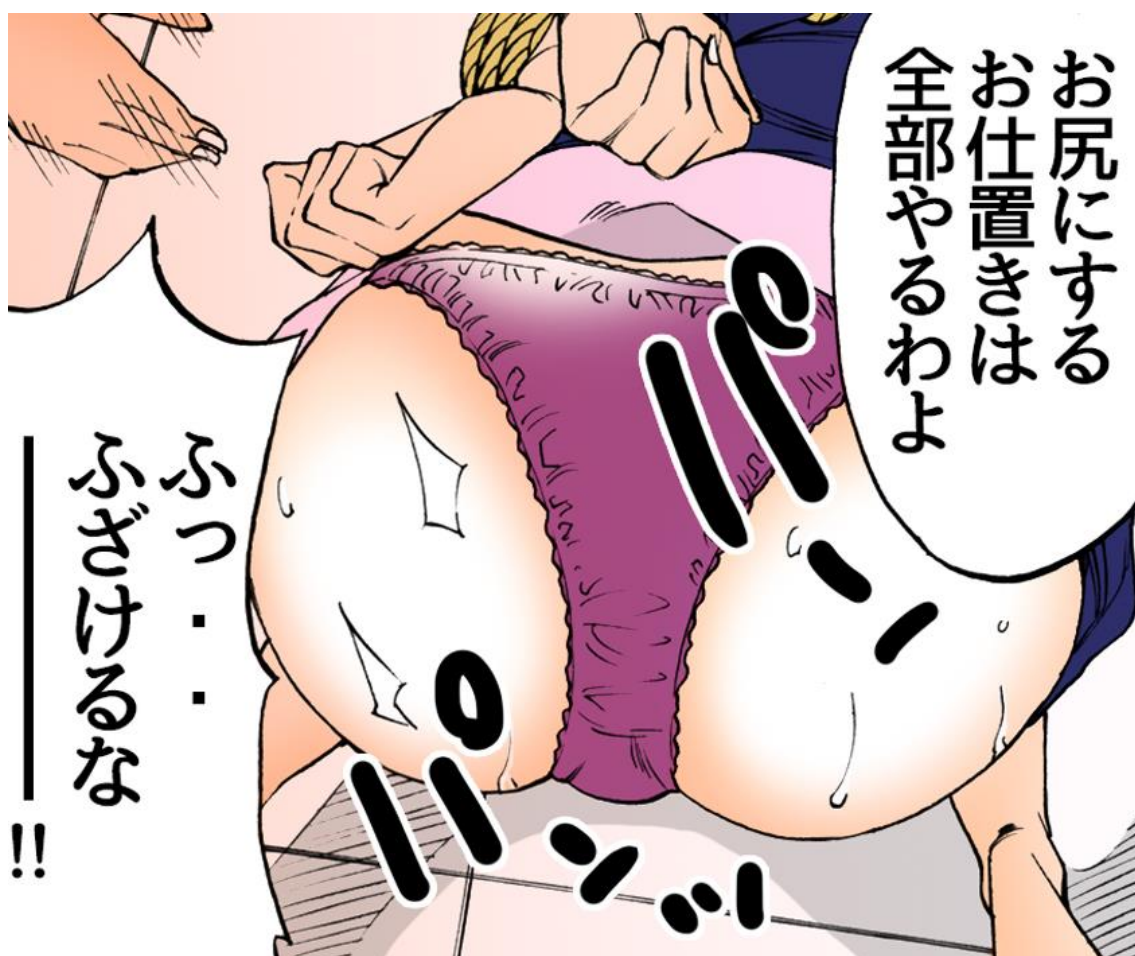
鼻をつく異臭と、何をするかわからない二人の行動に脅える洋子は、必死に口を閉じた。そんな洋子を気にもかけず、杏子は便が付着した指を鼻の穴に押しこんでしまった。

「っ！ い、いやああっ！ やめてえええっ！ 汚いっ！ やめてよおおっー！」

「うわっ、汚い。せっかくの化粧が台無しね。」

「こっちの鼻糞はどうしようかしら。そうだ、お尻の穴に入れてやろうよ。ついでにおばさんの肛門も見てやろうよ」

手馴れた動作で洋子を四つん這いにさせる。床に足首と太股を密着した状態で、はいつくばる姿勢。背中に杏子が馬乗りになると自然に尻が突き出る。



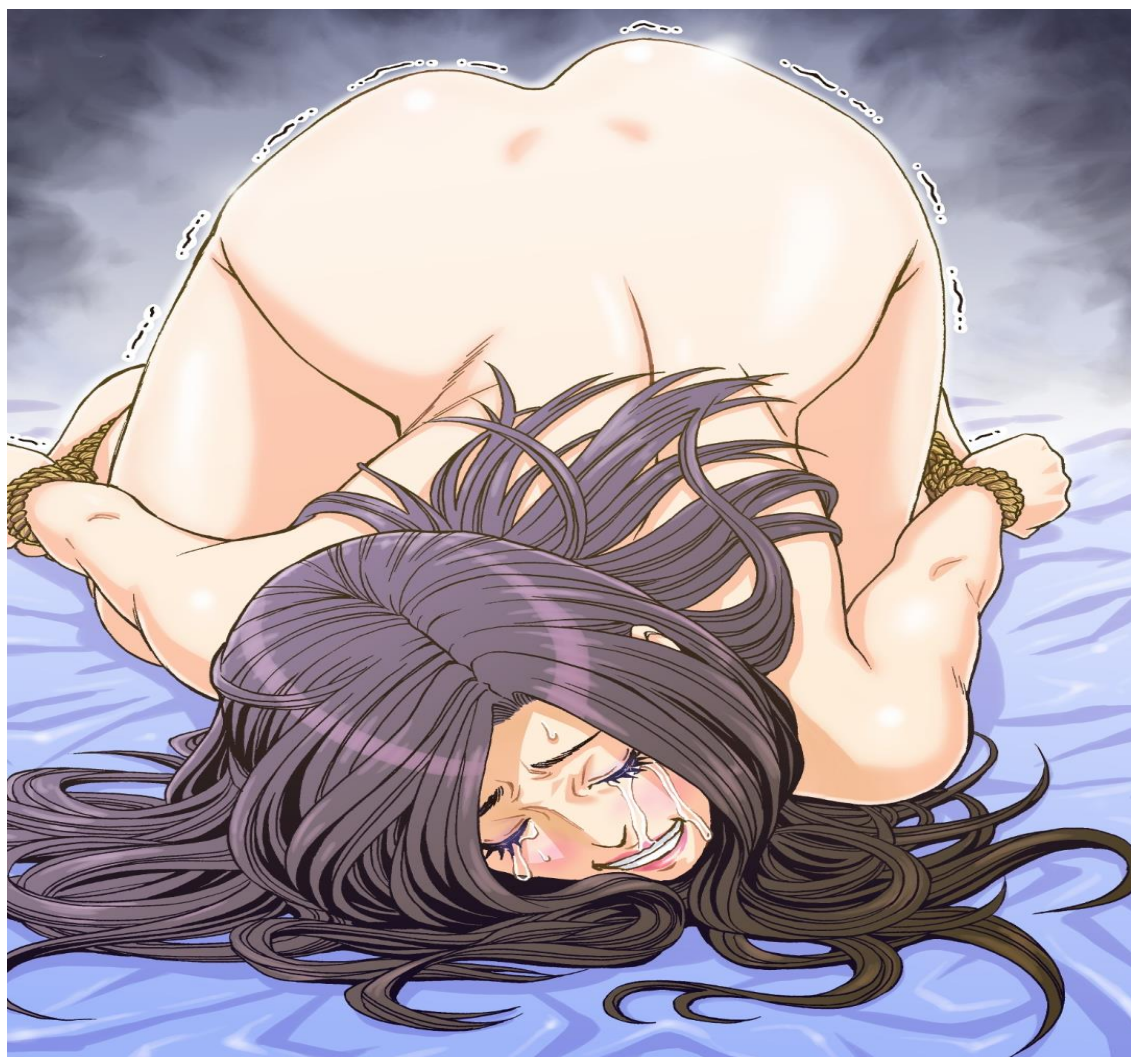
「やめなさいっ！ やめてよ……お願いだからあ……」

これから肛門を娘と同じ年齢の二人に見られる悔しさに涙が滲む。だが、必死の言葉の抵抗も空しくスカートは捲り上げられ、ストッキングとパンティーが一気に下げられた。

「嫌あああつ……」

響く絶叫は二人の女子高生の嗜虐性を刺激するだけだ。

「出た出た。お尻の穴。へえー、綺麗じゃん」



「本当だ。ここに私の指が入っていたのね」

「……こんな事って……悪夢だわ……」

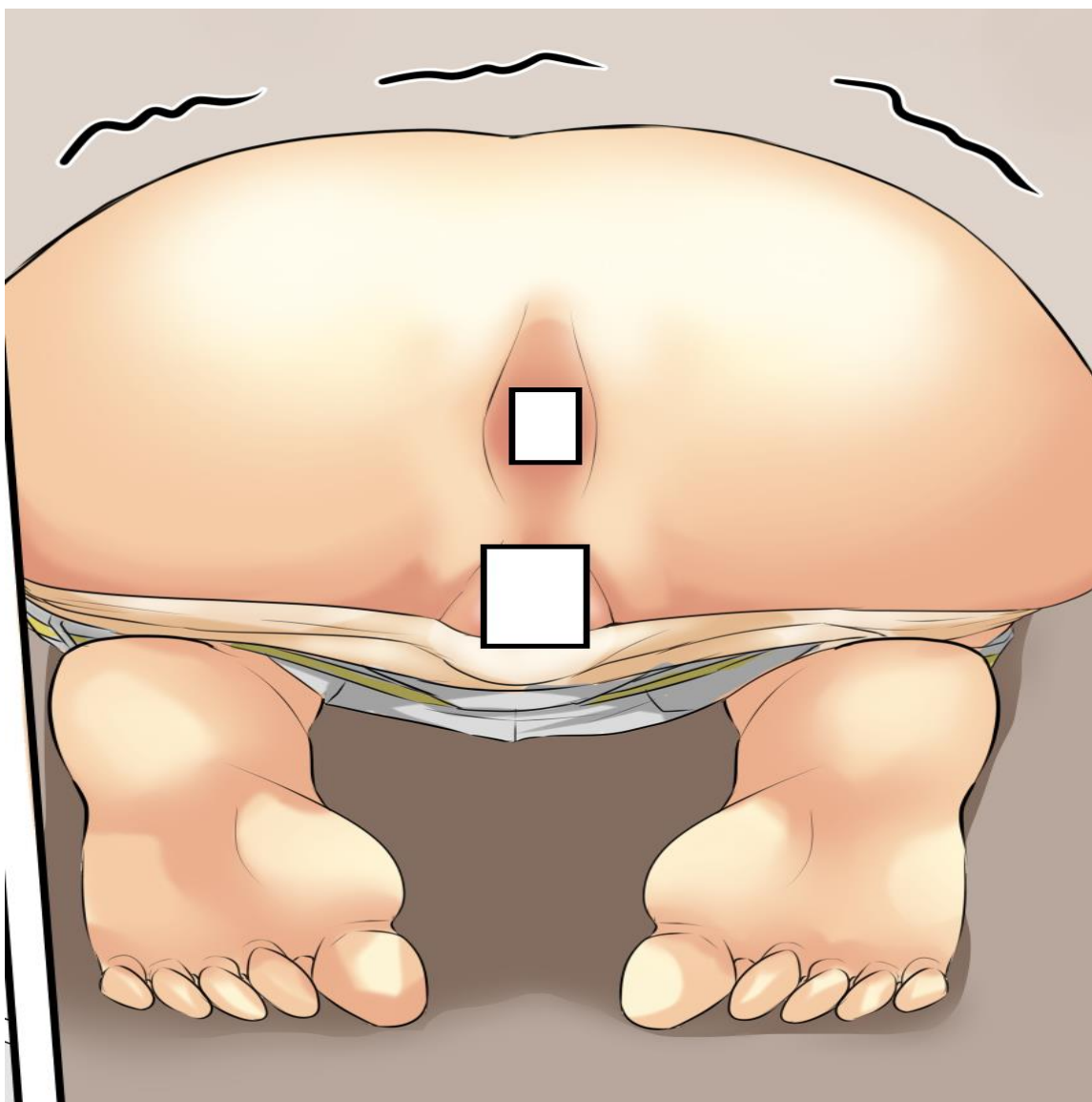
窮屈な格好で尻を観察される洋子。理不尽な理由から始まったこの現実を受け入れられるわけがなかった。



「でもなかなか辛抱強いじゃない。前の年増は肛門を見てやったら叫び声を上げてすぐに謝ったじゃない？」

「そうね『やめて下さい』って泣いてたわね。あの時は快感
だったわあ……」

言葉を失う洋子。ここで初めて、変態的な行為で他の女
も辱しめていたと理解する。



「おばさん、今のでわかったでしょう。他にも同じような方法で苛めてやったヤツがいるわ。人妻から同年代の子、幅広くね。どんなことをしたのか、これからじっくり教えてあげるわ」

第5話

「……他の人にも……？ そんな……〇〇がどこでこんな変態な事を覚えたの……」

高校〇年生、洋子から見ればまだ〇〇だが、二人の本性を悟り、恐怖で脅える。

「私達普段から援助交際やテレクラを使って、いろいろな経験をしているの。時には相手の希望で変なプレイもするわ。だからこんな方法も思いつくの」

「え、援助交際、テレクラ……」

「そうよ、たまに今のおばさんみたいに、お尻の穴を弄くられたりもするわ。やっぱり恥ずかしいわよね。おばさんはアナルセックスの経験はないの？」

「アナルセックスっ……って、な、なんて事を言うの……」

衝撃的な発言にこれ以上返す言葉が思い付かない。信じられない事実に呆然とする洋子。そんな彼女の肛門に向けて、静江の指が容赦なく進入してしまう。

「……や、……やめてえええっ……」

「ほら、汚い鼻糞を奥深くまで押し込んでやるわ」

「あ、あなた達……そんな所に興味を持つなんて異常だわ」

「あら、そんな事ないわ。男の人って案外、アナルに興味を持つ人って多いわよ？ アダルトビデオでもよく見かけるし……」

力を込めて、さらに指を動かす静江。洋子の悲鳴が響く。
必死の説得も無駄であった。

「いい気味ね。おばさん、〇〇にこんな事されて悔しいで
しょう？ でもまだまだ恥ずかしいことしてあげるから
ね？」

「おばさん……マンコよりお尻の穴を見られたり、弄られる
方がとても恥ずかしいと思わない？ 今日は肛門にたっ
ぷりお灸をすえてあげるからね。指だけじゃなくて他の方
法も考えてあるからね？」

「……この子達は……これ以上何をするっていうの？」

青ざめる洋子。もう頭が変になりそうだ。

しかし、この二人は、さらに辱しめると言うのだ。もはや〇〇
という悔りはなくなっていた。

ガチャ……

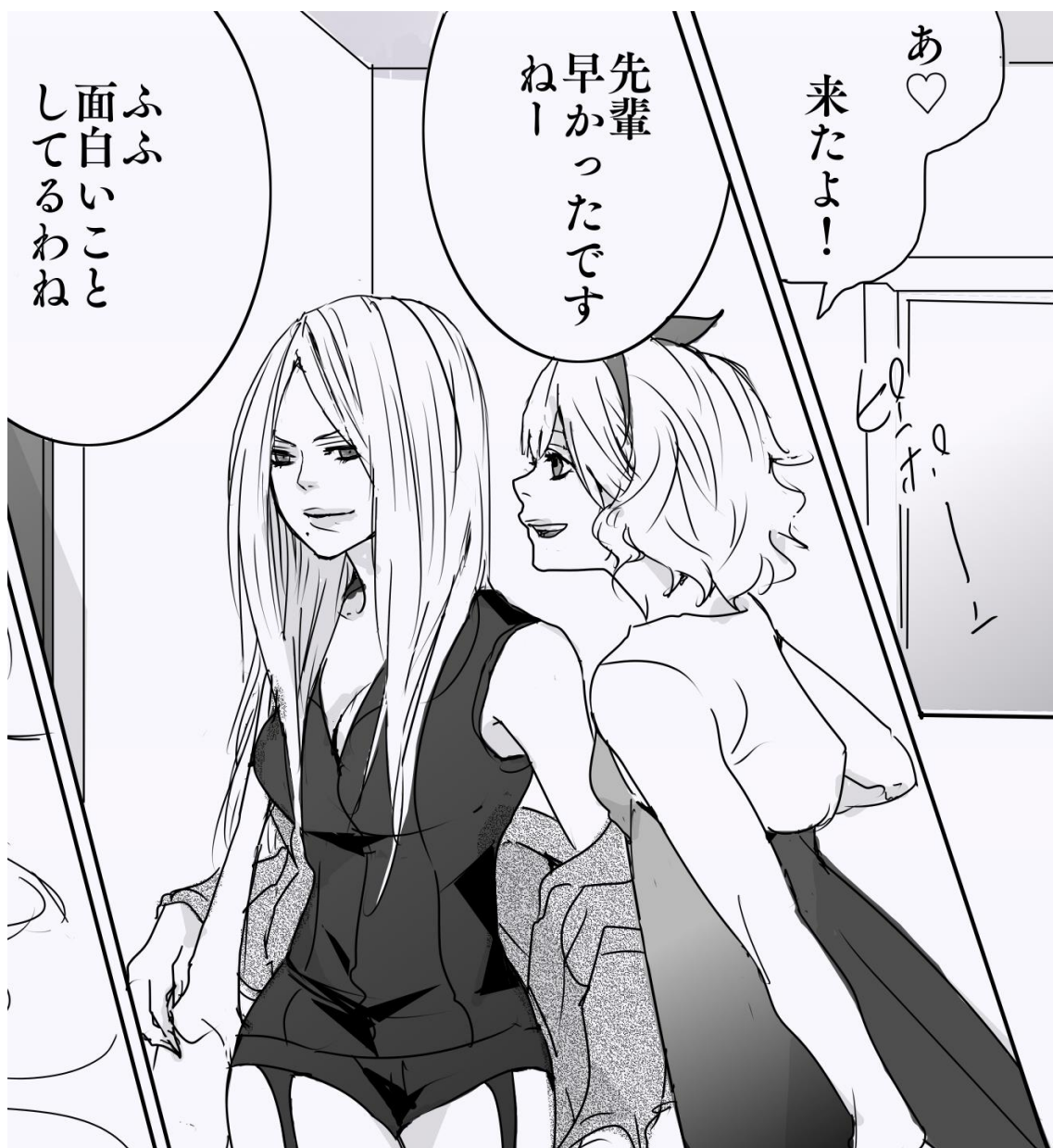
玄関を開ける音がした。洋子は助けが来たと思い込み、叫び声を上げた。

「おばさん、残念でした。今来たのは私達の仲間。おばさんにもっと恥ずかしい思いをしてもらう為に、素敵な道具を持って来てもらったの」

前髪をいじりながらニツタリと笑う。

「こっちは先輩。今日もいつも通りやっちゃって下さい」

二人の女の新たな登場であった。啞然とする洋子。一人が不敵な笑みを浮かべて口を開く。



「なるほど……今日はこの年増にタップリ浣腸すればいいのね」

第6話

……カンチョウってなによ……

意味を理解出来ない洋子。まさか便意を促す為の医療行為の浣腸だとは、すぐに気付く事はなかった。それよりも新たな女の加入に不安で仕方なかった。

千佳と紗江、二人の年は19歳。風俗で働いている。この二人からもさまざまな事を教わった静江と杏子。いままで四人で、何人の同姓を辱めたことか。

「先輩、今回も人妻です。いつも通りうまくいきました。でもなかなか、このおばさん強情ですよ。肛門まで見てやっても生意気なもの」

「へえー、そうなの？ でもそれ位のほうがやりがいがあるわね」

ガムを噛みながら平然としている女に、洋子の怒りが込み上げる。話の内容からこの二人が黒幕だと知る。そして先輩と言っていた事から、二人はこの女達から、変態的な事を教わったのだと理解したからである。

「あんた達ね。この子達に変な事を教えたのは……いますぐやめるように言いなさい。恥ずかしくないの？ 年下の子にこんなことさせてっ！」

怒りが収まらず、思わず口にしてしまった。

「おばさん、ケツの穴を丸出しにして怒っても迫力ないわよ」

洋子は自分の姿を改めて認識し、恥ずかしさのあまり、体が強張った。そこへ、千佳は噛んでいたガムを口から取り出すと、肛門に押し付けてきた。

「や……な、なにしたの？ やめてええっ！」

「あんまり汚い肛門だったから、見るのに耐えられなかったわ。だからガムでフタをしたの」

「……ガ……ガムですって？ なんて事を……取りなさいっ！ 早くーっ！」

大声で叫ぶ洋子。千佳は言われた通り、肛門にしっかり粘着したガムを取ったかと思うと今度は、洋子の頬に押し付けてきた。

「嫌だあっ！ ちょっとやめてよっ、取りなさいよっ！」

ついさっきまで肛門についていたガムを自分の顔に付けられ、嫌悪感を感じる。

「うるさいわね。えらそうに説教してんじゃないわよ。いままでおばさんみたいな強気な女を何人も屈服させてきたん

だからね。そのうち、おばさんも同じように泣かせて上げるからね」

鼻先に顔を近づけて来て脅す千佳。しかし洋子は湧き上がる怒りを押さえられず、完全に激昂して、唾を吐きかけた。

「ふざけんじゃないわよっ！ あんた達、覚悟しなさい。絶対許さないからっ！ 好きな事すればいいじゃないっ！ その分、後悔させてやるわっ！」

顔に吐きかけられた唾を拭いながら睨みつける。

「うわ、汚な……よくも……」

千佳は洋子の尻に向かい、おもいきり平手で数回叩いた。痛みに耐える洋子。

「いいわ、その強情な態度がどこまで続くかしら。おばさん、
今までどんな強気な女でも泣き崩れた、とっておきの方法
でお仕置きしてあげる」

紗江は持ってきたカバンを開けて待っている。

「紗江、浣腸するわ。浣腸器とグリセリンを出して」

第7話

千佳が紗江に浣腸の用意をさせている。

「なに……なにをするの……？」

「おばさん、言ったわよね。好きな事していいって。今からおばさんのお尻の穴に浣腸するわ。しかも強力なやつ。たっぷりウンコとオナラを出させてやるわ」

「な、なんですって……か、かん……」

恐ろしさ、恥かしさで目を見開く洋子。

「いい表情ね、おばさん。知ってるでしょう、浣腸。普通は便秘で出ない時に使うんだけど、SMとかで羞恥心を煽るのにも使われるのよ」

洋子はスカトロというものがあるのは知っていた。変態プレイで浣腸して排便を楽しむ行為。しかし、興味など当然あるはずもなかった。



「いやあっ！ 誰か、助けてええっ！」

「来ない、来ない、無駄よ。それより見てよ、この浣腸器。大きいでしょう。これ本格的なやつなのよ。薬局で見るのはイチジクが多いけど、それよりももっと大量に注入できるのよ」

初めて目にした浣腸器に息を呑む洋子。しかも同性の〇〇の前で、そんなことをされるなど信じられない。その傍ら、千佳は浣腸器にグリセリンを吸い上げていた。

周りの女達と、不気味な程の笑顔で浣腸を撫で回す千佳。

「……ま、待ちなさいよ。じよ、冗談よね？ ねえ、そうでしょう？ ねえったら……ねえ……」

100CC の浣腸器を手に持ち、洋子の目の前に来た千佳。

「おばさん、浣腸したことある？ 無さそうね。だったら説明してあげる」

すると紗江が、下半身裸になり洋子に尻を向けた。洋子の目の前に現れた紗江の性器と肛門。

「ひいっ……な、なにしてるのよ」

「この浣腸をね、こうやって肛門に差し込むのよ？」

紗江の肛門に深く進入した浣腸。どういうつもりなのか、浣腸器を回転させ、便を嘴管に付けているように見えた。想像を超える光景に洋子の体全体が無意識に震える。

「やめなさい……く、狂ってるわ。そんな方法で脅かすなんて卑怯よっ！」

ようやく抜かれた浣腸器の嘴管を確かめる千佳。

「さあてと、おばさん。さっきはよくも唾かけてくれたわね。
私はやられた事は倍にして返す主義なのよ」

「な、なにをするのよっ！ やめなさい……さ、さっきの事は
謝るわ……」

「フフフ、おばさん。なかなか濃い化粧ね。頑張ってる年に
抗ってるじゃないの。ちょうどいいわ。綺麗に洗い流して
あげる」

次の瞬間、浣腸の嘴管の先端を洋子の顔面に向け、
100CC のグリセリンを勢い良く放出した。

「ああああああ一、ぐ……やめ、やめてよおおっ……」

顔面をグリセリンで濡らされた洋子。ついさっきまで紗江の肛門に深く埋まっていた嘴管から噴出している為、嫌悪感が堪らない。激しい絶叫を上げるが、千佳は洋子の開いた口めがけてグリセリンを飛ばした。

「げぼおっ……ごほっ……や、やめ……」

「どう？ おばさん。化粧もとれたし、喉の乾きも潤ったんじゃないの？ さっきまで紗江の肛門に入っていた浣腸器からのお薬でね。アハハハハ、最高じゃない？」

呆然とする洋子。顔全体を濡らし、僅かに飲み込んだグリセリン。数秒後、洋子の悲鳴が部屋に響き渡る。

第8話

グリセリン塗れになって、グリセリンと涎が混ざりあい糸を引いて垂れる。震えてなにも言わない洋子。

肛門からは指を入れられ、浣腸液をかけられ、さらに口にも飛ばされた。

屈辱感がヒシヒシと胸を圧迫する。

「おばさん、どうだった浣腸液は？ 化粧がとれちゃったわね」

悔しさで吐き気すらしてきた。しかし、すぐに新しい陵辱が始まろうとしていた。

「……あ、なに？ やめてっ……」

静江がセロハンテープを取り出し、肛門に貼り付けてしまった。しっかり肛門に圧着したテープ。透明の為、肛門がテープにより引きつっているのが見える。

「見て見て、なんかこれ、イソギンチャクみたいよ」

さらに上からテープを押さえつけ、肛門にテープがより強く張り付く。まだ何をされているか分からない洋子。

しかし、肛門に感じる不快感が物語る。

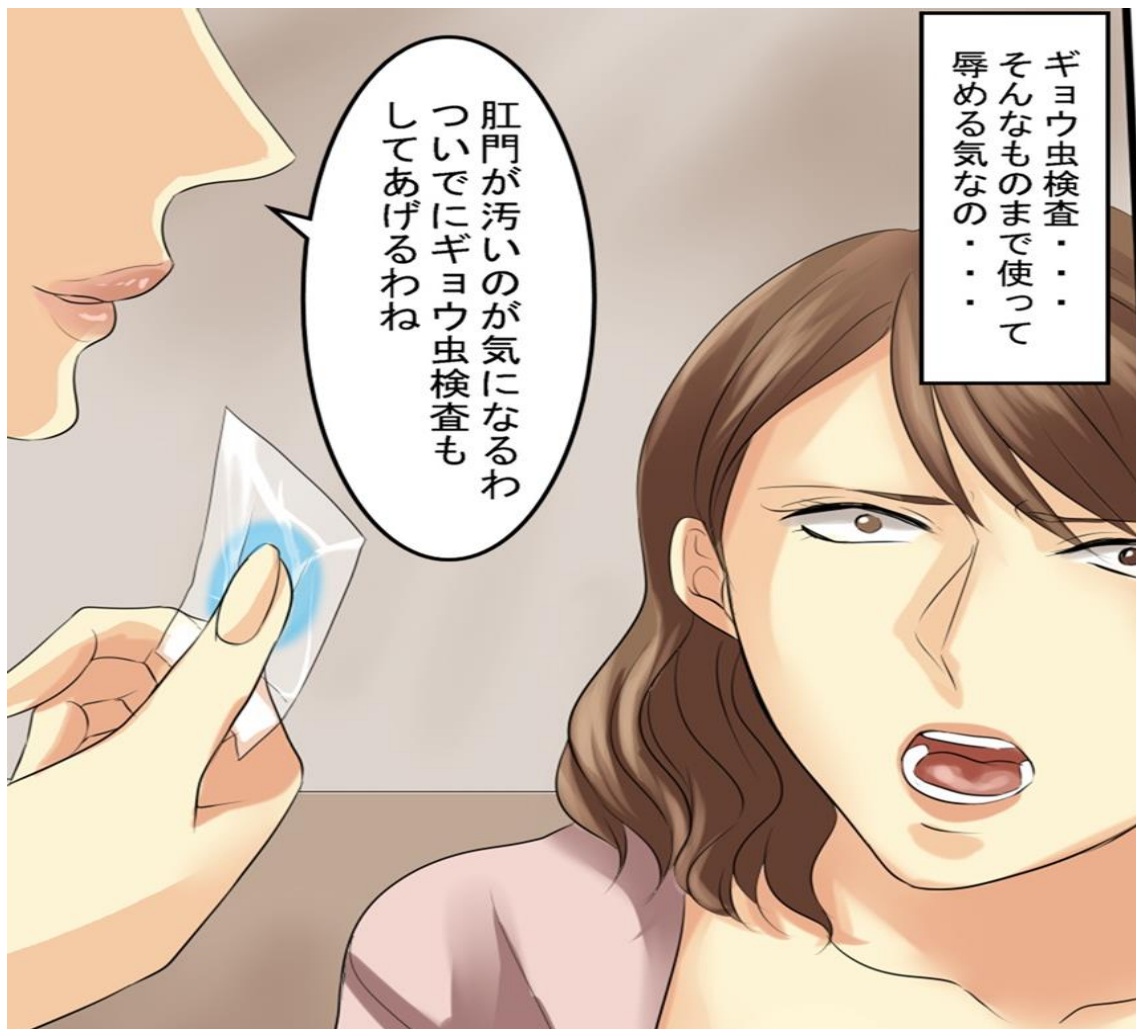
「な、なにしてるのよ。やめてえ……もうお尻は……」

「おばさん、いまセロハンテープをお尻の穴に貼り付けたの」

「テ、テープってなんのために……いやあっ！」

少しずつ剥がされるテープ。粘着力で肛門の皮膚が一緒に浮き上がる。その様を楽しみながら見つめる女達。洋子の悲鳴など関係ない。

「おもしろーい。なんかさあ、これって子供の頃にした、あれなんだっけ……そうそうギョウチュウ検査みたーい」



「……ひ、酷すぎるわ。あなた達、こんな変なことして……
なにが楽しいの……？」

あまりの仕打ちに涙ぐむ。

「まだ泣くには早いわ」

「……うっ！」

一気に剥がされたテープ。しっかりと肛門のシワが写っている。静江がそれを確認し、臭いも嗅いでいる。

「おばさん、強烈な臭いね。さあて、これどうしようかしら。
このテープ……」

「な、なにをするのよ」

そのテープを、洋子の鼻の穴に向けて貼り付けてしまった。肛門に貼り付けていた面が鼻の穴に直接当たるため、すぐに洋子に襲いかかる屈辱。

「い、いや……」

自分の肛門についていたテープの臭いを無理矢理嗅がされている。その行為の羞恥に耐えられなかった。

「どう？ おばさん。自分のお尻の穴を嗅がされている気分は。よく臭ってね」

さらに静江は猿轡で口を塞ぐ。口からの呼吸が困難な為、鼻から吸い込むしかない。当然、その度に無理矢理、自分の臭いを嗅ぐしかない。

「……うう、うううう……」

猿轡をされた洋子が、苦しそうな呻き声を漏らす。楽しみながら見つめる静江は今度はテープを自分の肛門に貼り付けていた。

「おばさん、今度は私のお尻の穴の臭いを嗅がせてあげる。よく臭ってね」

第9話

静江は、自分の肛門に貼り付けたテープを、洋子の鼻に付いているテープと張り替えた。

「どう？ どっちが臭いかしらね。私とお婆さんの肛門は…
…」

呻き声しか出せない洋子。顔を左右に振りながら、眉間にシワをよせて、もがき苦しんでいる。しばらくして静江は、洋子の猿轡を外し、鼻のテープも剥がした。

「……ああっ、あうっ、もうやめ……、酷いわ……もう、謝るからやめてよ……」

すでに洋子は〇〇として侮っていた最初の気持ちは跡形も無くなっていた。段々とエスカレートしていく辱しめの行為に脅える。

「おばさん、いい顔ね。おばさん位の年齢をいたぶるのが一番興奮するの。もっと叫び声を聞かせてよ」

「……いや、もう、いやあああつ！」

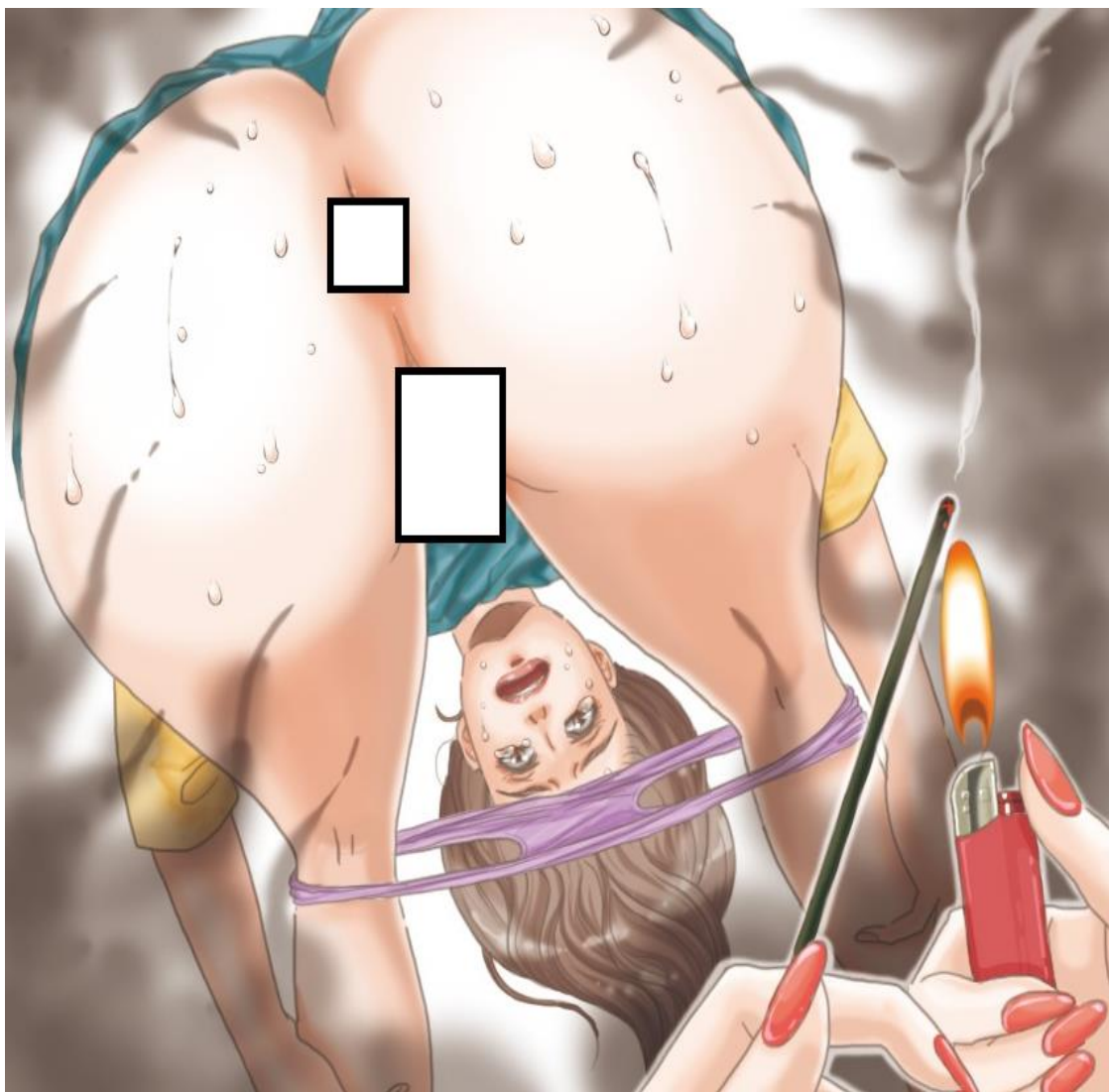
「ねえ、おばさん。いつもは〇〇を叱る立場なのに、その〇〇に頭が上がらないのは悔しいでしょう？ 私達はいつも、親や教師に叱られてムカついているの。だから今日はその分も仕返ししてやるわ」

「無茶苦茶な事を……完全に自分達の逆恨みじゃない……」

「ねえ、おばさんは子供にどんなお仕置きするの？ お尻叩くの？ お灸するの？ 私は小さい時、お灸をやられたわ。熱いわよ。私あの頃、いつか大人に、やり返してやりたいと思っていたの。良かった、今日はその願いが叶うわ」

静江はそう言うと、お灸とライターを取り出し、ライターを着火して見せた。その行為に恐怖を感じる洋子。

「さあて、どこがいいかしら？ お、ば、さん？ どこにお灸をすえてほしい。背中？ 手？ お尻？」



押し黙る洋子。

「どこかって聞いているのよお！ なに黙ってるの？ そう。そうやって抵抗しているのね。いいわ、おばさんのオマンコとお尻の穴にお灸をすえてあげる」

火のついたライターを持つ静江の恐ろしい発言。いままでの行為から、冗談には受け取れない。

「……や、やめて……ごめんなさい……あ、謝るから……そんな事……」

「そうそう、素直な態度で応じましょうね。お尻の穴になんてお灸をすえられたら明日からウンコ出来ないわね。あ、明日の前に今日ウンコしないといけなかったわ。浣腸されてね。おばさん。お灸が終わったらやりましょう。汚いお尻の穴に浣腸を……」

……かんちょう……なんで私が……仕返しの為に浣腸してそれから……いやよ、誰か来てよ……助けて……

心の中で泣く洋子。死にたくなるくらいの陵辱に脅えて耐えるしかない。そんな必死の洋子の尻の上に二つのお灸が置かれた。

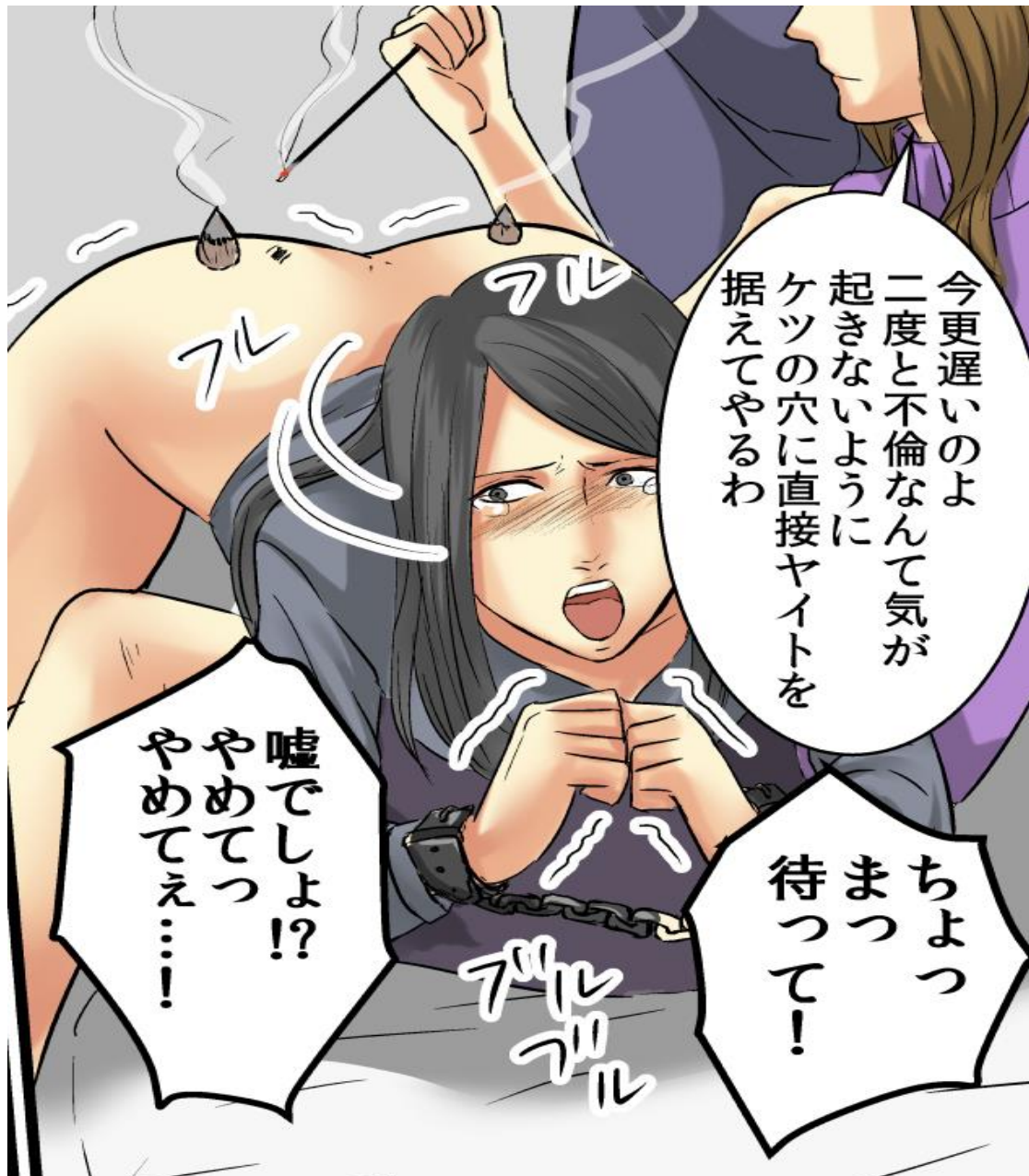
「やっぱりお灸のお仕置きはお尻が一番ね」

火をつけられたお灸の先端。洋子の尻で少しずつ燃えて、その牙を表す。数分後、徐々に尻に感じてきた熱に、恐怖を感じた洋子。

「あ……ああっ……ちよつと、あつ、熱いわよおおっ！」

声をあげずにはいられない洋子。そんな彼女に四人の女達は欲情しながらも、四つん這いの姿勢を崩させないように手足を押さえつける。

「待って、あつ……ちよ、待ちなさい。本当に、熱い」



「そうですね。熱いでしょう。そんなことを大人は〇〇にするんだから。私の時も熱かったけど、なかなかやめてくれなかったわ。だから、おばさんももう少し苦しみましょうね」

「……そ、そんな。あついつてば……もうやめて、ああ、熱いわ、いやあ……」

いい年の女が、お灸で子供のように泣き叫ぶ姿。必死に逃げようと動こうとするが四人で押さえられている為、無駄である。

「ぐぐ……熱っ、やめ……」

「もう少しよ、もう少し。あ、終わったわ。どうだった？ お灸は……」

「……うう、うう……」

「なに泣いてるの？ おばさん、いい年なんだから、お灸
ぐらいで泣かないでよ。」

「それにしてもいい気分だったわ。なんていうの、サディス
トの気持ちも分かるわね」

「さあ、おばさん。次はいよいよ浣腸よ。」

……かんちょう……そんな、嫌よ……